

清音三音節名詞の意味に関する研究 (I)

——意味の相対的逸脱方向性——

藤原 哲

I 問題

多くの研究が、語の使用度数 (word frequency)、語価値 (word value) と、言語の視覚的認知閾 (visual recognition thresholds) との間に一定の関係があることを実証してきた。その解釈には、次の二つの類型が区別される。

第一の解釈は、言語の視覚的認知閾の主要な決定因として、語の使用度数を強調する。語の使用度数が、学習された反応であるので、使用度数と認知閾との間にある関係を反応確率と反応潜時との関係であるとする。この解釈は反応確率と反応潜時とが、単一の根本概念「習慣強度」の顕在的側面であると考える学習理論の立場である (11)。

第二の解釈は、言語の視覚的認知閾の主要な決定因として、語価値を強調する。認知閾の差異が、言語の一属性である感情的特質 (価値、善一悪、感情的調子、情緒的誘意性) の差異に基づくとする。この解釈は、言語の感情的特質が、知覚的選択 (perceptual selectivity) もしくは知覚的防衛 (per epinal defense) の機制によって、直接、言語の視覚的認知閾を規定していると考え、知

覚過程におけるモチベーション理論の立場である (9)。

一方ジョンソン・R・C、ら (4) の研究は、語の使用度数が異なると、あるいは実験的に変化させると、語の他の属性すなわち語価値が、組織的に異なること、あるいは変化して行くことを実証した。日本語を材料とした、筆者の追試実験も、この事実を実証した (3)。語価値は、一般的意味において、語の使用度数と関係がある。したがって、研究者が、自分では語の使用度数の要因を検討しているつもりであっても、実際には、語価値を操作していたかも知れない。また、逆の場合があるかも知れない。今日、語価値および使用度数と言語の視覚的認知閾との間に存在する関係は、語の使用度数が一定であって、語価値の異なる単語群と、語価値が一定であって、語の使用度数の異なる単語群を刺激とした実験を積み重ねることによって、新しい角度からその理論化が要請される段階にある。

筆者は、使用度数と語価値との間には、一般的に関係のあることが明らかになったので、使用度数をマッチングした、語価値を異にする刺激語と、語価値をマッチングした、使用度数を異にした刺激語を選出する目的で、語の使用度数(正確には、語の熟知度 familiarity)

(value)の明らかにされた資料(5)を使って、単語の語価値を測定した。その整理の過程で、刺激の要因と、言語認知者の要因に關する、次の二点が基礎課題として問題になった。

(一) 言語材料間には、語の使用度数と語価値が仮りに等しくても、意味論的にも異なった刺激語があるのではないか。意味論的語価値には、類型があるのではないか。もし語価値に類型があるならば、この類型を支える潜在的因子の、言語の視覚的認知関に及ぼす効果を検討しなければならぬのではないか。

(二) 言語の意味構造の一次元である語価値性の判断には個人差があるのではないか。言語主体の内的世界の投影によって、「よい」語価値の方向に反応する傾向のある人と、「わるい」語価値の方向に反応する傾向のある人がいるのではないか。もし語価値の判断における個人差に一貫した法則性が認められるならば、そして語価値が言語の認知関を規定しているならば、言語認知者の主体的要因の、言語の視覚的認知関に及ぼす効果を検討しなければならないのではないか。

本稿は(二)番目の問題を検討するための基礎的作業である。

Ⅰ 方法

刺激語 調査で使用した刺激語は、単語の熟知価と語価値の二つの基準から選出した。熟知価は、理論的には、一定の刺激の客観的な出現頻数の増加函数である刺激の属性として定義される。

熟知価の指標は、操作的には、心理学的、精神測定の尺度法によって測定される主観的な反応として定義される(6・7)。小柳ら(5)は、『武田、久松編、角川国語辞典(12)』に、見出し語として記載されている、清音三音節名詞(外来語、動詞から転化した名詞、代名詞及び数詞を含む)を一応チェックし、その中から、古語、人名、地名、国名としてのみ記載されている語、及び方言、同一の音節

を含む語をのぞいた残りの三二八七語を刺激語として選出し、大學生二四〇名を被調査者とし、第Ⅰ図のような、図式評定尺度法によって、日本語三音節名詞の熟知価を測定した。図式評定尺度法による「全くない」、「稀に」、「時々」、「しばしば」、「非常に多い」の各段階に1、2、3、4、5の段階点を与え、連続間隔法によって、各刺激語の尺度値を求め、その結果を熟知価表にまとめている。

非常に多い
しばしば
時々
稀
全くない

第Ⅰ図 図式評定尺度

語)の語を全部抜き出した。次に予備調査とし、六人の心理学徒に、各刺激語に対する主観的印象を三段階の評価の尺度上に評定してもらった。その結果から、六人の判断の一致度の高かった刺激語を順番に抽出して、熟知価における「高」・「中」・「低」の三条件と、語価値における「よい」・「どちらでもない」・「わるい」の三条件の組合せからなる九種の範疇毎に、それぞれ三〇語を抽出した。

本調査では、分量を減ずるために、各範疇毎に刺激語を二分して、同じ条件の調査用紙を二種類作成し、それぞれを第Ⅰ形式と第Ⅱ形式と名付けた。各調査形式に含まれる刺激語数と被調査者をまとめると、第Ⅰ表のようになる。熟知価の「高」、「中」、「低」の順番に、第Ⅰ類、第Ⅱ類、第Ⅲ類と名付けた。調査の両形式を総合すれば、第Ⅳ類の九〇語は、辞書の意味が添加された場合と、添加されなかった場合における意味反応が測定された。意味の付加された条件下での第Ⅳ類を特に第Ⅳ類とした。調査第Ⅰ形式における第Ⅳ

第1表 調査形式・被調査者、および刺激語数

調査形式	集団	人数	刺 激 語					計		
			E	F	第Ⅰ類	第Ⅱ類	第Ⅲ類		第Ⅳ類	
第Ⅰ形式	文科	27	よ	い	15 (2)	15 (2)	15 (1)	15 (1)	60 (6)	
			どちらでもない	15 (1)	15 (1)	15 (2)	15 (2)	60 (6)		
	理科	21	わ	る	い	15 (2)	15 (2)	15 (1)	15 (1)	60 (6)
			計	45 (5)	45 (5)	45 (4)	45 (4)	180 (18)		
第Ⅱ形式	文科	26	よ	い	15 (1)	15 (1)	15 (2)	15 (2)	60 (6)	
			どちらでもない	15 (2)	15 (2)	15 (1)	15 (1)	60 (6)		
	理科	26	わ	る	い	15 (1)	15 (1)	15 (2)	15 (2)	60 (6)
			計	45 (4)	45 (4)	45 (5)	45 (5)	180 (18)		
全 体	100	合 計	90 (9)	90 (9)	90 (9)	90 (9)	360 (36)			

E: Evaluative word value, F: Familiarity value

類の語は、第Ⅱ形式において、第Ⅳ類になるようにした。また、調査第Ⅰ形式における第Ⅳ類の語は、第Ⅱ形式において、第Ⅲ類になるようにした。辞書の意味は、新村出編、広辞苑(10)により、同音異義語のある場合は材料から除いた。

[E] わるい	1	2	3	4	5	6	7	よ	い			
[P] かたい	1	2	3	4	5	6	7	や	わ	ら	か	い
[A] 能動的 (活動的)	1	2	3	4	5	6	7	受	動	的		

第2図 意味評定尺度

集団間での意味判断の一致度を検討するために、各範疇毎に任意に抽出された三語(三〇語の十分の一)が、調査の両形式に含まれるようにした。第1表における()内の数は、集団間の一致度をみるために、他の調査形式の対応する範疇から抽出して加えた数である。手続 両形式の調査用紙とも、総刺激語を四ページにわたって印刷した。各ページとも、その上部にモデルとして、第2図のような七段階の評定尺度を印刷した。その下端には、熟知価の類別に、四九乃至五〇語をランダムに五列に分けて排列した。刺激語は、音声的要因を排除するために、「かたかな」で印刷して呈示した。刺激語の横に解答欄を設け、各刺激語に対する、各尺度上での印象の強弱を、整数で記入させるようにした。この種の意味測定法は意味微分法と呼ばれている(8)。意味構造に関する研究(1・2)から「価値性」、「潜在性」、「活動性」因子を軸とする意味空間の安定性が明らかとなったので、ここでは、直交的な、三種の軸を代表する三尺度が利用されたわけである。

教示 この調査が有意味三音節名詞に対する主観的な語感を調査するものであることを説明し、次に、「E」尺度では、「女神」を練習語として使い、刺激語か

ら受ける主観的な感じが、「よいーわるい」のどちらの形容詞に近い
 いか、その程度を判断させ、反応段階の得点を解答欄に記入するよ
 うに説明した。「P」と「A」尺度についても同じ要領で説明した後、
 意味評定ではあまり考えこまないで、刺激語から受ける第一印象を
 スピーディに反応すること、もし同音異義語が浮かべば、最初頭に
 浮かんだ単語の方で解答すること、決して無解答のものがないう
 ことにすること等注意了。

被調査者 広島大学学部学生一〇〇名。文科系二集団と理科系二
 集団が対象になった。一語あたりの被調査者数は四八乃至五二名で
 ある。

調査日時 昭和三十七年七月上旬。調査は筆者が集団別に実施し
 た。意味評定に要した時間は約七〇分、遅いもので九〇分であつ
 た。

Ⅲ 結果と考察

一 信頼性

調査用紙回収後、集団間における意味の一致度を検討するために
 使用した語と同じ刺激語を、前の調査結果とは無関係にするよう
 ということの特に強調して、再調査した。再調査完了後の感想文
 によれば、再調査用紙を見て、「いっばいいくわされた」(文科三年
 某被調査者)と面くらっている者が多く、また、「前の調査結果と
 無関係にするようにと言うが、反応数が非常に多く、前の反応を全
 然記憶していないので、必然的に、前と後の意味反応では無関係に
 ならざるを得なかった」(文科三年某被調査者)類の感想を多数の
 者が記していた。反応数が多く、機械的作業であったことと、予期
 しなかった再調査が課せられたことなどによって、再調査への記憶
 因子の影響は比較的少なかったと思われる。

第2表 集団間信頼性係数 (r) - 36語一

集 団	第 I 形式		第 II 形式	
	文 (N=27)	理 (N=21)	文 (N=26)	理 (N=26)
文科	—	.972 ※※	.958 ※※	.974 ※※
理科	.972 ※※	—	.950 ※※	.954 ※※
文科	.958 ※※	.950 ※※	—	.974 ※※
理科	.974 ※※	.954 ※※	.974 ※※	—

※※ P < .01

1 集団間の意味の一致

本稿では、「E」尺度上の意味反応が考察の対象となつてい
 るので、信頼性も、この尺度上での結果だけを分析した。各集団別に、三
 六語それぞれの評定平均値を算出し、集団間の評定平均値の錯差積
 相関係数を求めた。その結果は第2表のとおりである。この結果か
 ら、文科と理科系集団は、評価的尺度上での評定値(意味の第一成
 分)に、集団差がないと言える。また、調査の第I形式と第II形式

において、集団間の意味
 の一致度を考察するため
 に使用された三六語が置
 かれた位置が全く異なっ
 ていたにもかかわらず、
 そして、調査の両形式に
 おいて、この三六語を除
 く他の刺激語が、全く異
 なっていたにもかかわらず、
 三六語の意味が集団
 間で高い一致を示したこ
 とから、調査系列内にお
 ける刺激語の相対的位置
 の違いによって、その意
 味判断が影響されること
 もないと言える。ともか
 く、集団間で驚くべき意
 味の高い一致が認められ

た。

2 第一回調査と再調査間の意味の一致

各集団毎に、再調査による三六語の評定平均値と第一回調査の対応する刺激語の評定平均値との錯差積相関係数を算出した。その結果は第3表のとおりである。再調査法による信頼性係数は、集団間での意味の一致度よりもまだ高かった。この事実から、個人内における、驚意に価する、意味の安定性が認められた。

第3表 再調査信頼性係数 (r)
— 36語 —

形式	集団	人数	r
第I形式	文科	27	.979**
	理科	21	.977**
第II形式	文科	26	.985**
	理科	26	.978**

** P < .01

調査の条件差および被調査者の条件差とは無関係に、集団間において、意味の一致度が高かったこと、そして、第一回調査と再調査間において、意味判断の変動が少なかったこと、これらは、意味調査において、大学生の意味評定判断が驚くほど安定し、自己の意味判断に忠実で正確であることを物語っている。

二 集団基準からの意味の逸脱

周知のように、再調査法によって得られた意味判断の高い信頼性は、個人内での判断に変動が少ないことを示すものであって、個人内において判断が一致していることを示すものではない。また、集団間における意味の完全に近い一致は、被調査者の専攻の違いによって、意味が異なることを示さないことを示しても、同一集団内での意味の個人差を否定するものでもない。ある刺激語に対して、A被

験者は、二度の調査にわたって、評価的尺度上で陽極方向（尺度の原点から「よい」の方向）に反応しながら、B被験者は陰極方向（「わるい」の方向）に反応することがある。

本稿の目的は、意味の個人差、特に集団基準からの、個人の意味の逸脱の法則性を究明することであった。ここで使う「集団基準」とは、一定の集団において、集団成員が共有している平均値の意味である。

ある刺激語における個人の意味の逸脱は、集団基準と、個人の意味の距離から求められる。N個の刺激語における、個人の意味の逸脱度 (D_j) は、次式によって求められる。

$$D_j = \sqrt{\frac{1}{N} \sum_{i=1}^N (x_{ij} - \bar{x}_i)^2} \quad (1)$$

集団全体での意味の逸脱度 (D) は、

$$D = \sqrt{\frac{1}{MN} \sum_{j=1}^N \sum_{i=1}^M (x_{ij} - \bar{x}_i)^2} \quad (2)$$

の式によって求められる。ここで、「被験者」、「刺激語」、「刺激語への」被験者の意味評定値、「刺激語の集団基準（評定平均値）」、「被験者の数」、「刺激語の数」を示す。なお、上述の式は、概念間の距離を算出する、オスグッド・C・E・(8)のD_{ij}得点からヒントを得たものである。

以後の分析では、第I形式の調査を受けた理科系集団の資料を使った。この集団では、「E」尺度上、一九八語のD値は、一・七二三であった。これは、各刺激語の集団基準を中心にして、個人の意図が、平均すると、「E」尺度上一・七二三単位動揺していること

を示す。では一体いかなる刺激語に対する意味反応において、意味の個人差が顕著に現われるのだろうか。

1 意味の逸脱と語価値

仮説一 集団基準として刺激語が分化している刺激語群（「よい」あるいは「わるい」語価値を持つ語）に対する意味判断は、個人間で一致するが、刺激語が分化していない刺激語群（「どちらでもない」語価値を持つ語）に対する意味は、個人間で一致しないであろう。

理科系集団における一九八語それぞれの評定平均値を求め、一九八語を語価値の次元で、「よい」、「どちらでもない」、「わるい」の三範疇に分類した。各刺激語の評定平均値が尺度上一・〇〇—二・九九のばあい、「わるい」の範疇に、三・〇〇—四・九九のばあい、「どちらでもない」の範疇に、五・〇〇—六・九九のばあい、「よい」の範疇に分類した。この基準から分類された語の熟知値と語価値の関係は第4表のようになっていた。語価値別に、集団基準からの意味の逸脱度を求めたのが第5表である。結果は仮説を支持しなかった。この結果は、語価値が「わるく」なればなるほど、意味判断における個人差が増大することを示した。しかし、第Ⅲ類の刺激語は、その熟知値が低いために、意味の個人差が少ない（仮説二参照）が、語価値が四九語中四六語まで、「どちらでもない」の範疇に分類されていた。このことが、「どちらでもない」の範疇に属する刺激語において、人格の深層部の投影的判断による意味の個人差が増大するであろうという予想に反した結果を生んだ主な理由であると考えられる。

2 意味の逸脱と熟知値

仮説二 熟知値の高い刺激語における意味の個人差は、熟知値の

第4表 調査第Ⅰ形式における熟知値と語価値との関係

E \ F		I	Ⅱ	Ⅲ	IV	計
よ	い	17 (34.0)	14 (28.0)	0 (0.0)	6 (12.2)	37 (18.7)
	どちらでもよい	19 (38.0)	22 (44.0)	46 (43.9)	28 (57.1)	115 (58.1)
わる	い	14 (28.0)	14 (28.0)	3 (6.1)	15 (30.6)	46 (23.2)
	計	50 (100.0)	50 (100.0)	49 (100.0)	49 (99.9)	198 (100.0)

() は頻数の百分率を示す。

第5表 意味の逸脱と語価値

E	刺激語数	集団基準からの意味の逸脱	
よ	い	37	1.552
どちらでもない		115	1.663
わる	い	40	1.954
計		198	1.723

低い刺激語における意味の個人差よりも大であろう。

同一の事象に接しても、その経験効果は個人間で異なる。この経験効果（経験の内面化、意味づけ）における個人間の差異の距離は、ある事象に関する経験の回数が増せば増すほど開いてくるであろう。ある事象に関する経験が多いか少ないかということは、言語の属性の一つ、語の使用度数や熟知値に対応する。熟知値の高い刺激語ほど、意味の個人差が大になると予想される。

集團基準からの意味の逸脱を、単語の熟知価値別に算出した。その結果は第6表のとおりである。熟知価値の第Ⅱ類と、辞書的意味が添加された第Ⅲ類を比較すると、熟知価値が高まれば高まるほど、心理的內包的意味の個人差が増大して行くことがわかる。また、第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類の順序に、内包的意味の個人差が少なくなっている。以上の事実から、熟知価値の高い刺激語における意味の個人差が、熟知価値の低い刺激語における意味の個人差よりも大であろうという仮説は支持された。なお、熟知価値が高まるにつれて、意味の個人差が増大していく函数関係は双曲線函数に当てはまるようである。

第6表 意味の逸脱と熟知価値

F	刺激語数	集團基準からの意味の逸脱
I	50	1.812
II	50	1.805
III	49	1.468
IV	49	1.807
計	198	1.723

三 集團基準からの意味の逸脱の個人差

集團的意味として刺激語が未分化である刺激語に対する意味判断ほど、言語主体の内的世界の投影によって、意味の個人差が増大すること、および、語の熟知価値が高ければ高いほど、言語主体における経験効果の要因が強く作用し、その意味の個人差が大になることを、個人間で分析してきた。では、集團基準からの意味の逸脱の様相には個人内において一貫性が認められるだろうか。すなわちA事態において集團基準から意味の逸脱度の大であった個人は、B事態においても同様に、集團基準からひとく逸脱した意味を抱いている

であろうか。集團基準からの意味の逸脱の様相は、個人の意味反応傾向の指標になるであろうか。

1 意味の逸脱の個人差と語価値

仮説三 語価値が「よい」の範疇に属する刺激語群において、集團基準からはなほだしく逸脱した意味を抱いている言語主体は、語価値が「どちらでもない」あるいは「わるい」の範疇に属する刺激語群においても同様に、集團基準からひとく逸脱した意味を抱いているだろう。

もし、集團基準からの個人の意味の逸脱の様相が、個人の意味反応傾向の指標になるとすれば、語価値を異にした各刺激語群の条件下において、同一の言語主体は、一貫した意味反応傾向を示すであろう。

個人単位で、単語の語価値別に、集團基準からの意味の逸脱度を算出した。この逸脱度の分布はほぼ正規分布であったので、語価値を異にした各刺激語群における逸脱度相互の錯差積相関係数を求めた。結果は第7表のとおりである。逸脱度相互のどの組合せの相関係数も、一パーセントの危険率で有意である。この事実、ある語価値の刺激語群において、集團基準からの意味の逸脱の程度の大である言語主体が

第7表 意味の逸脱の個人差と語価値

E	数刺激語	よ	い	どちらでもない	わるい
よ	い	37	—	※※ .696	※※ .586
どちらでもない		115	※※ .696	—	※※ .648
わるい		46	※※ .586	※※ .648	—

※※ P < .01

された。

まず、上述の(1)式から、総刺激語に対する、集団基準からの個人の意味の逸脱の程度を算出した。総刺激語に対する個人の逸脱度の分布も、ほぼ正規分布であった。次に、集団内における逸脱度の平均値と標準偏差を求め、平均値プラス標準偏差の値より高い逸脱度を示した個人を選び出すと、二人中四人いた。この四人を意味の

第9表 意味の高度逸脱群と普通逸脱群における意味反応の位置習慣の比較

集 団	人数	検 定	
		極位置に反応した頻数	全反応数に対する百分率
高度逸脱群	4	258	32.58
普通逸脱群	17	424	12.60

高度逸脱群、残り十七人を普通逸脱群と名付けた。両群における、両極の位置を選ぶ頻数と全反応数に対する頻数の百分率を求めた。結果は第9表のとおりである。

高度逸脱群における尺度の極位置に反応する比率は、普通逸脱群におけるその率の約三倍弱(第9表検定参照)であった。このことから意味の高度逸脱者は、尺度上両極の位置に反応する位置習慣を持っていると言える。もし、この尺度上の位置習慣と精神発達・ことばに対する感受性の発達との間に対応関係があるとする解釈が正しいならば、集団基準からの意味の高度逸脱者は、ことばに対する感受性が貧しいと結論される。なお、意味の逸脱度と感受性との対応関係は、他の問題(四の2・五の1)の展開で再度考察する。

2 意味の逸脱と意味反応における変動性

仮説六 集団基準からの意味の高度逸脱者は、意味反応をする場面が異なれば、そうでない人に比較して、その意味反応がより変動しやすいためである。

ことばに対する感受性が乏しいならば、その意味反応は曖昧になり、意味反応をする場面が異なる毎に、変動した反応をしやすいのである。もし、集団基準からの意味の高度逸脱者が第一回調査と再調査間において、頻繁な意味反応の変動を示すならば、それは、意味の高度逸脱者が、ことばに対する感受性の豊かでないことを物語っているだろう。

第10表 意味の高度逸脱群と普通逸脱群における意味反応の変動性の比較 (1)

変動の「ずれ」の絶対値	高度逸脱群		普通逸脱群	
	百分率	確率	百分率	確率
0	43.1	1.000	61.1	1.000
1	31.3	.569	28.8	.389
2	18.1	.256	7.5	.101
3	4.2	.075	2.0	.026
4	2.6	.033	0.6	.006
5	0.0	.007	0.0	.000
6	0.7	.007	0.0	.000

第一回調査と再調査の結果から、同一の刺激語に対する意味反応の「ずれ」を、高度逸脱群と普通逸脱群の両群に分けて算出した。結果は第10表とおりである。表において、「ずれ」の絶対値が「0」とあるのは、両調査間で尺度上全然変動のなかったことを、「1」とあるのは、調査間で尺度上一単位変動の

第11表 意味の高度逸脱群と普通逸脱群における意味反応の変動性の比較 (2)

変動の「ずれ」の絶対値	高度と普通逸脱群における反応の大小関係	有意性検定	
		X ²	P
0	高 < 普	15.568	※※
1	高 > 普	0.350	
2	高 > 普	16.248	※※
3	高 > 普	2.440	
4	高 > 普	5.024	※
5	※※※		
6	高 > 普	4.256	※

※※ P < .01 ※P < .05 (CR)

※※※「ずれ」の絶対値が5である反応が両群においてたまたまなかつた。

あったことを示す。「2・3・4・5・6」も同じ要領である。その横の百分率は、各「ずれ」の絶対値単位の変動のあった項目(刺激語で、被験者、尺度(E)の組合せ)数の、全項目数に対する率である。確率は、両テスト間で、各「ずれ」の絶対値単位以上の変動をすることがないと結論を下す危険率である。

再テスト間での変動からみた両群の反応百分率は、全然変動のなかった項目数の率が普通逸脱群において大であること、そして、絶対値二単位以上の変動のあった項目数の率が高度逸脱群において大であることを示している。また、「ずれ」の絶対値三単位以上の変動をすることがないと結論を下す危険率は、高度逸脱群では、七・五パーセントであるが、普通逸脱群では、二・六パーセントであ

る。これらの事実は、仮説どおり、意味反応をする場面が異なれば、意味の高度逸脱群の意味反応が、普通群に比較してより変動しやすく、反応に安定性がないことを物語っている。集団基準からの意味の高度逸脱者における反応様式の特徴は、尺度上両極の位置に反応する位置習慣を持つていること、そして、意味反応をする場面が異なれば、その意味反応が比較的曖昧なために、変動しやすく、安定していないことであった。この結果は、以前の研究と相まって(1)、意味判断における尺度上の位置習慣と、精神発達およびことばに対する感受性の敏感さとの間に対応関係があることを示唆している。

五 集団基準からの意味の相対的逸脱方向性

これまで検討してきた意味の逸脱という概念は、刺激語の評定平均値(集団基準)と個人の評定値との偏差だけを問題にしてきたが、その逸脱の方向性へと発展する可能性を秘めていた。この逸脱の方向性においてこそ、最もよく人格の深層が表現されているのではないだろうか。この考えに基づいて、集団基準からの「意味の相対的逸脱方向性指数」を考案した。ここで言う方向性とは、個人の意味が集団基準から陽極(語価値が「よい」の極)の方向に逸脱しているか、あるいは陰極(語価値が「わるい」の極)の方向に逸脱しているかということの意味する。また、集団基準からの、意味の相対的逸脱方向性指数とは、陽極に逸脱している程度と、陰極に逸脱している程度の比率を意味し、その値は

$$Y_i = \frac{\sum_k (x_{ki} - \bar{x}_k)^2 - \frac{(\sum_j (x_{ij} - \bar{x}_i))^2}{k}}{\sum_k (x_{ki} - \bar{x}_k)^2 + \frac{(\sum_j (x_{ij} - \bar{x}_i))^2}{k}} \times 100 \quad (3)$$

の式から求められる。この式において、 X_1 「個人」の、意味の相対的逸脱方向性、 X_2 「個人」の評定値より陰極方向にある集団基準、 X_3 「個人」の評定値より陽極方向にある集団基準、 X_4 「個人」の評定値より陽極方向にある集団基準、 X_5 「集団基準から陰極方向に逸脱している、個人」の評定値、を示す。この場合、 X_1 が0より大であれば、個人」の意味は、集団基準から陽極方向に、 X_1 が0より小であれば、個人」の意味は陰極方向にあることを示す。 X_2 が0に極めて近いばあいは、個人」の意味は、集団基準からの方向性を持たないことを示す。

では、この意味の相対的逸脱方向性は、意味の逸脱の程度といかなる関係にあるだろうか。どのような条件下での意味の相対的逸脱方向性が、内的世界の投影機制を最もよく反映しているであろうか。

1 意味の相対的逸脱方向性と意味の逸脱

仮説七 語価値が「よい」の範疇に属する刺激語群の条件下では、意味の高度逸脱者は、「負」の相対的逸脱方向性を示し、語価値が「わるい」の範疇に属する刺激語群の条件下では、「正」の相対的逸脱方向性を示すであろう。

語価値が「よい」の範疇に属する刺激語群への反応において、その意味の方向性が「正」である個人、または、語価値が「わるい」の範疇に属する刺激語群の条件下で、その方向性が「負」である個人は、集団の意味としてのその刺激価の純度を高める人である。ことばに対する感受性の豊かな人である。もし、意味の高度逸脱者が、ことばに対する感受性の乏しい人であるならば、かれは、集団の意味としてその刺激価が分化している語の刺激価の純度を濁らせる働き

をするだろう。もしそうであれば、意味の高度逸脱者は、語価値が「よい」の範疇に属する刺激語群の条件下では、その方向性が「負」になり、「わるい」の範疇に属する刺激語群の条件下では、その方向性が「正」になり、意味の相対的逸脱方向性と、意味の逸脱の程度との相関は、語価値が「よい」と「わるい」の範疇に属する各刺激語群の条件下において、逆になるだろう。

第12表 語価値の三条件下における意味の相対的逸脱方向性指数と逸脱度との相関

意味の相対的逸脱方向性指数		単語の語価値				
		よ	い	どちらでもない	わるい	全体
意味の逸脱度						
全	体	-0.479	-0.186	.636	.023	

語価値からみた三種の刺激語群と総刺激語との四つの条件下で、上述の(3)式により、集団基準からの意味の相対的逸脱方向性指数を個人別に算出した。語の熟知価間、および、語価値間では、集団基準からの意味の逸脱の程度には、個人内で高い一貫性が見いだされた(三の1・2)ので、ここでは、総刺激語数から求めた個人の意味の逸脱度を使用して、意味の逸脱度と、四種の条件下での相対的逸脱方向性指数との順位相関を求めた。結果は第12表のとおりである。

この結果から、集団基準からの意味の逸脱の大である言語主体は、集団基準が陽極あるいは陰極に片寄っている刺激語に対して、その方向とは逆の方向で、集団基準から逸脱していることがわかる。この事実を、集団基準からの意味の高度逸脱者が両極へ反応する位置習慣を持つ

ている事実と合わせて考察すれば、意味の高度逸脱者は、集团的意味としてその刺激価（意味論的語価値）がよく分化している語に対しては、その方向での極反応をあまりしなくて、むしろ分化した方向とは逆の方向で極反応をしたり、弁別的反応をしていると解釈される。意味の高度逸脱者は、集団内でより分化した集团的意味の刺激価の純度を濁らすような、他の集团的成員とはかけはなれた意味反応をしている。それに対して、集団基準からの意味の逸脱度の小である言語主体ほど、分化した集团的意味の刺激価の純度を高めるような、集団を基準とするかぎり、厳密で正確な反応をしている。このことから、意味の高度逸脱者は、ことばに対する感受性が豊かでないということと同時に、意味反応における尺度上の位置習慣と精神発達およびことばに対する感受性の敏感さとの間に対関関係があると結論される。

意味の相対的逸脱方向性指数の、語価値間での相関は一定しないという予想のもとに、語価値の三条件下における、意味の相対的逸脱方向性指数間の順位相関を求めた。結果は第13表のとおりである。語価値が「よい」刺激語群と、「わるい」刺激語群における、意味の相対的逸脱方向性指数間の「負」の相関は、意味の高度逸脱者が「よい」語価値を持つ刺激語群の条件下で「負」の方向性を、「わるい」語価値を持つ刺激語群の条件下で「正」の方向性を示した結果と一致する。第12表と第13表は、仮説と解釈を支持している。しかし両表は、語価値間において、意味の相対的逸脱方向性に一貫した関係の認められないことも示している。意味の相対的逸脱方向性に一定した関係が得られなかった主要な原因は、意味の高度逸脱者が、ことばに対する感受性の点で著しく劣っていたからであるが、それにしても、刺激語の条件が異なれば、個人の、意味の相対的逸脱方向性も変ってくる事実を否定しえない。では、意味判断にお

る言語主

の内的世界の投影機制は否認されるべきであろうか。パーソナル色の眼鏡を通して外界を知覚する個人と、常に、悲観的に外界を着色する個人は、意味判断において差異を示さないのだろうか。

2 意味の相対的逸脱方向性と人格投影過程

第13表 語価値の三条件下における、意味の相対的逸脱方向性指数間の相関

語 価 値	よ い	どちらでもない	わるい
よ い	—	-.010	-.499
どちらでもない	-.010	—	.114
わるい	-.499	.114	—

によって影響されていた。この条件下での反応では、外部的な刺激側の規定度が強いために、言語主体の内部的な人格の深層を投影する余地は少なかった。刺激の外部的要因の規定度が大きい条件下での意味反応には、言語主体の内的世界の投影機制が表現されているとは解釈されない。それに対して、語価値が「どちらでもない」の範疇に属する刺激語群の条件下での意味の相対的逸脱方向性は、意味の逸脱度、感受性の敏感さとは無関係であった。感受性の敏感さに影響される条件下での方向性指数とも無関係であった。したがって集团的意味としてその刺激語が未分化である刺激語群において

次のことに気づく。語価値が「よい」と「わるい」の範疇に属する刺激語群の条件下での意味判断は、個人の意味の逸脱度、すなわち、ことばに対する感受性の敏感さによって強く影響されていた。このような条件下での意味判断は、刺激の刺激価を忠実に反映する感受性の敏感さに

第14表 熟知価間における、意味の相対的逸脱方向性指数の一貫性

熟知価	I	II	III	IV
I	—	※※ .732	.213	※※ .697
II	※※ .732	—	.378	※※ .617
III	.213	.378	—	※※ .670
IV	※※ .697	※※ .617	※※ .670	—

※※ P<.01

語価値が「どちらでもない」の範疇に属する語に対する意味反応だけを対象とし、語の熟知価別に、個人単位で、意味の相対的逸脱方向性指数を算出した。次に、熟知価間で、その指数の順位相関を求めた。第14表がその結果である。

表中、熟知価の第Ⅲ類と他の類の指数の相関値が低い。これは、第Ⅲ類に属する刺激語が、無意味綴字に近く、意味の個人差が小さかったためである。第Ⅲ類を除けば、個人内において

こそ、言語主体の内的要因により着色された意味反応をする余地が十分にあると解釈される。未分化な刺激価を持つ語に対する意味反応においてこそ、言語主体の内的世界の投影機制が躍如として表現されてくると予想される。もしそうであれば、種々の条件下での、未分化な刺激価の語に対する意味反応には、一貫した意味の相対的逸脱方向性が、個人内において認められるはずである。果してどうだろうか。

仮説入 刺激価が未分化である語に対する意味反応は、個人内において、語の熟知価を異にする条件下でも一貫した、意味の相対的逸脱方向性を示すであろう。

、かなり高い一貫性が認められる。このことから、言語主体の主体的要因に基づく、意味の個人差は、語価値が「どちらでもない」の範疇に属する刺激語に対する意味反応において最も顕著に現われ、その個人の反応傾向は、事態が異なっても、一貫性を示すことがわかった。集団基準からの陽極方向への反応、および陰極方向への反応は、偶然的でなく、バラ色の眼鏡を通して外界を知覚する個人と、悲観的に外界を着色する個人の内的世界の投影結果であることが明らかになった。

現段階では、意味の相対的逸脱方向性によって把握される意味反応の個人差と、それを規定する要因の人格論的条件分析に至っていない。がともあれ、従来の「言語の視覚的認知関」に関する実験において等閑視されていた、言語の認知者の個人差が、この種の研究において考慮されなければならない一要因であるという見通しを十分に得ることができた。

IV 結果の要約

- 1、大学生の意味判断は、集団間の意味の高い一致度と、反応の安定度から見て、驚くほど信頼性が高い。
- 2、集団基準からの意味の逸脱の程度と語価値とはあまり関係がない。それに対して、単語の熟知価が高いほど、意味の個人差が大になる。
- 3、集団基準からの意味の逸脱の程度には、各条件間において、その条件が、言語の属性である熟知価および語価値であっても、個人内に一貫性がある。
- 4、この集団基準からの意味の高度逸脱者の意味反応様式の特徴は、価値性尺度上、両極の位置に反応する位置習慣を持っていることとであり、意味判断をする場面が異なれば、その反応が比較的曖昧

なために、変動しやすく、安定していないことである。以前の研究(1)と合わせて意味判断における、尺度上の位置習慣と精神発達、ことばに対する感受性の敏感さとの間には対応関係が認められる。

5、集団基準からの意味の高度逸脱者は、より分化した刺激の刺激価(意味論的語価値)の純度を濁す、感受性の豊かでない人である。このために、「よい」語価値を持つ刺激語群の条件下での、集団基準からの意味の相対的逸脱方向性指数と意味の逸脱度との関係は「わるい」語価値を持つ刺激語群の条件下での、両者の関係と逆になる。

6、集団の意味として刺激価の分化した刺激語に対する意味反応を規定する要因は、刺激の刺激価を忠実に客観的に反映する感受性の敏感さであり、より外部的要因である。それに対して、刺激価の未分化である刺激語に対する意味反応を規定する要因は、より内部的要因である。ここに言語主体の内的世界の投影機制が表現される。

7、刺激価の未分化である刺激語群に対する内的世界の投影の意味反応は、集団基準からの意味の相対的逸脱方向性指数によって法的に把握される。この方向性指数は、事態を異にしても、個人内で一貫性のある傾向を示す。集団基準から陽極方向において意味を抱いている言語主体は、事態(熟知価)を異にしても、集団基準から陽極方向にある意味を抱いている。この法的な個人の反応傾向を誘発させる刺激語は、その刺激価が、集団を基準とすれば、未分化のものである。

8、上述の諸結果は言語の祝覚的認知関の決定因とその理論化に接近するための、一つの有力な手がかりを与えてくれる。

文 献

1 藤原哲意味構造の発達—オズグッドの意味微分法によって—
国文学叢、一九五九、二三、一一三—一二五。

2 藤原哲美的判断の構造に関する因子論的研究—意味空間交動性の一考察—
広島大学心理学教室修士論文抄、一九六〇、六一—一一三。

3 藤原哲言語の使用度数と語価値との関係について(未発表)

4 Johnson, R. C., Thomson, C. W., & Frinke, G. Word values, word frequency, and visual duration thresholds. *Psychol. Rev.*, 1960, 67, 332—332.

5 小柳恭治・石川信一・大久保幸郎・石井栄助 日本語三音節名詞の熟知価の心研、一九六〇、三〇、四九—五七。

9 Noble, C. E. The meaning—familiarity relationship. *Psychol. Rev.*, 1953, 60, 89—98.

7 Noble, C. E. The familiarity—frequency relationship. *J. Exp. Psychol.*, 1954, 47, 13—16.

8 Osgood, C. E., Suci, G. J. V., & Tannenbaum, P. H. The measurement of meaning. Illinois, University of Illinois Press, 1967.

6 Postman, L., & Schneider, B. M. Personal values, visual recognition, and recall. *Psychol. Rev.*, 1951, 58, 271—284.

10 新村出編 広辞苑 一九五五、東京岩波書店。

11 Solomon, R. L., & Howes, D. H. word frequency, personal value, and visual duration thresholds. *Psychol. Rev.*, 1951, 58, 256—270.

12 武田祐吉・久松潜一編 角川国語辞典、一九四六、東京、角川書店。

付記 研究を終始ご指導下さり、テストにご尽力下さった広島大学

古浦・酒井・清水・野地・小川・広畑先生、ならびにテストに協力していただいた学生諸兄姉に深く感謝の意を表します。

—昭和37年10月15日稿— (本学心理学研究室助手)